

# 鉄道第二連隊基地の設営経緯と千葉工業大学津田沼校舎への兵舎転用に関する歴史的研究

Historical study on the background of the construction of a base by the 2nd Railway Regiment of the Japanese Army and the shift of its barracks to the Chiba Institute of Technology's Tsudanuma School building

●  
藤木 竜也  
建築学科 准教授

●  
Tatsuya FUJIKI  
Dept. of Architecture, Associate Professor

●  
2016年9月16日受付

●  
Received : 16 September 2016

The target of this study is the Chiba Institute of Technology's Tsudanuma School building located in Tsudanuma, Narashino City, Chiba Prefecture. The location was originally a base for the 2nd Railway Regiment of the Japanese Army. I investigated the background of the construction of the base and its disappearance after its barracks were demolished and changed into a campus after World War II. The base originally extended from the west, at a point closer to Tsudanuma Station, to the east. However, when the school buildings were constructed, they were arranged in the opposite manner, from east to west. During the Showa 40's (1965–1975), the barracks gradually disappeared as new school buildings were constructed.

キーワード：鉄道第二連隊，千葉工業大学津田沼校舎，兵舎，軍事施設の跡地利用，学舎への転用

## 1. 研究の背景と目的

千葉県は戦時中に多くの軍事施設を擁した「軍都」と呼ばれた歴史を持つ。これは終戦と同時に役割を失うのは明白で、後に様々に転用されていく。つまり、戦後における千葉県の都市形成において旧軍事施設の跡地利用が果たした意味の大きさを認めるものであるが、これまで建築史・都市史の観点から、その実態を俯瞰しようとする研究は行われていない。

千葉工業大学津田沼校舎も鉄道第二連隊基地を前身として、兵舎を学舎に改修して転用してきた歴史がある。『千葉工業大学50年史』には、基地施設払下げの経緯から、その後学舎群が整備された推移をまとめているものの、そもそも津田沼にどのようにして鉄道連隊の兵舎が築かれたのか、また千葉工業大学の学舎に転用された兵舎をはじめとする旧基地施設の詳細についてもふれられていない。

そこで本稿では、防衛省防衛研究所所蔵の公文書や千葉工業大学同窓会事務局所蔵の古写真、さらに国立国会図書館所蔵の明治から昭和戦前期に測量された古地図と国土地理院航空写真などから鉄道第二連隊基地の設営経緯と千葉工業大学津田沼校舎での学舎への兵舎の転用と解体に至るまでの歴史の変遷を明らかにする。この研究により得られる知見は、旧軍事施設の転用・跡地利用に見る戦後千葉県の都市形成過程に関する歴史的研究の一端を構成するものとして、かつ「千葉工業大学前史」ともいえる千葉工業大学の歩みを知る上でも意義深いものになるだろう。

## 2. 鉄道連隊基地の津田沼設置

鉄道連隊とは、戦地で鉄道の敷設、修理、運転などに従事する建設工兵の部隊のことで、これは日清戦争（明治27年2月–明治28年11月）において戦線の拡大により補給輸送に困難が生じるようになり、1895（明治28）年3月に臨時鉄道隊・臨時軽便鉄道隊を編成したことに始まる。

日清戦争終結後ほどなく、戦地での軍事物資や兵員の輸送に鉄道を用いることが決まり、1896（明治29）年11月28日、東京市牛込区河田町に所在した陸軍士官学校内（現在の東京女子医科大学病院の位置）に鉄道連隊の前身となる鉄道大隊が創設された。基地については、翌1897（明治30）年6月28日に多摩郡中野村（現在のJR中野駅北口一帯）に移転したが、日露戦争（明治37年2月–明治38年9月）の後に新たに基地を設けることになった。これは1905（明治38）年12月29日に「辺鄙ニシテ且ツ支線ナル為幹線鉄道ノ運行ニ影響ヲ及スコト無ク加フルニ特ニ多額ノ演習費ヲ要セスシテ充分ニ實地練習ノ實ヲ挙クルニ足ルヘキ一挙兩得ノ榮トス」との理由から総武鉄道（現・総武本線）、房総鉄道（現・外房線）の区間を鉄道大隊の演習訓練にも兼用して運行・経営することの閣議決定を受けたもので<sup>1)</sup>、候補の3地区を比較検討した結果が1906（明治39）年2月に「鉄道大隊及全材料廠敷地偵察報告」として報告されている<sup>2)</sup>。この3地区というのは、津田沼停車場南方地区（図1-I）、津田沼停車場北方地区（図1-II）、習志野捕虜病院敷地（図1-III 現在の千葉県習志野市東習志野1丁目）のことで、習志野捕虜病院というのは日露戦争で捕

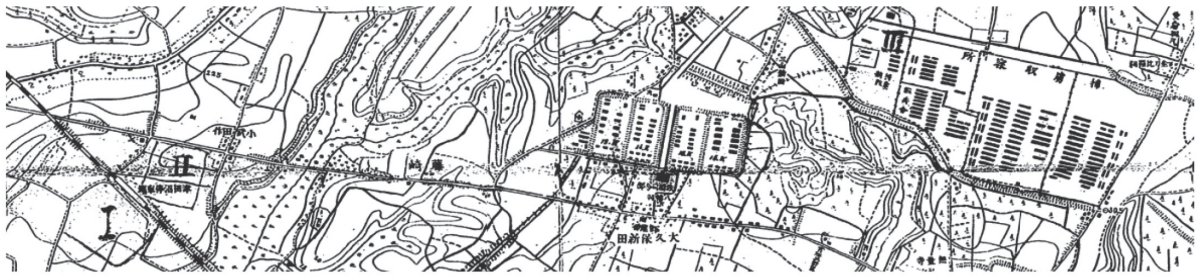


図1 鉄道大隊移転先候補地<sup>3)</sup>

表1 「鉄道大隊及全材料廠敷地偵察報告」による各候補地の利点・欠点

候補地	○	×
I 津田沼停車場南方地区	・広潤、平坦な畑地で水質良好 ・将来的な基地拡張の対応が容易	・敷地買収の費用が必要
II 津田沼停車場北方地区	・広潤、平坦な畑地で水質良好 ・将来的な基地拡張の対応が容易	・敷地買収の費用が必要 ・南方地区に比べ、基地拡張には狭い
III 習志野捕虜病院敷地	・敷地買収の費用が不要	・敷地整備費用が南方地区に比べて高額

表2 「鉄道大隊移転地衛生調査報告」による各候補地の衛生状況

調査項目	津田沼予定地	習志野予定地
1 地勢及地質	・畑地として周囲には河川・沼地がない ・周囲村落には600m～1kmの距離がある ・兵営予定地は地盤が高く、乾燥している	・兵営予定地は地盤が高く、乾燥している ・北方に沼地があり、ぬかるみが激しい
2 地水	・水位が高く、水量が豊か	・水位が高く、水量が豊か
3 土地の清濁	・10数戸の民家が所在するが、村落とは離れている ・沼などがなく、水はけがよく清浄	・騎兵連隊の兵営が近い ・周辺村落の炊煙が多く、灰などが漂っており、津田沼に比べて清潔さは劣る
4 気象	・西または北からの風が強く、砂礫が飛ぶ	・西または北からの風が強く、砂礫が飛ぶ
5 付近村落の健康状態	・周辺住民には消化器疾患が多数いるが、呼吸器疾患は1名に過ぎない ・「トラホーム」(伝染性の慢性結膜炎)の疾患が見られるが、重い伝染病はなく、周辺村落の健康状態は良好	・周辺村落の人口が多く、かつて赤痢患者が多数生じた経緯があり、津田沼に比べて劣る

虜となったロシア兵を治療するために置かれており、捕虜解放と共に役目を終えることが見込まれていた施設であった。

この報告による3つの候補地の利点・欠点は(表1)の通りで、敷地買収の費用が必要だが、津田沼停車場南方地区(図1-I)が適当とし、材料格納のための倉庫も建設出来ることが理想と結論づけられている。

鉄道大隊基地の設置については、さらに入念を期すために1906(明治39)年3月6日から8日にかけて「鉄道大隊移転地衛生調査」が行われた<sup>4)</sup>。これは津田沼停車場南方地区、同北方地区を「津田沼豫定地」、習志野捕虜病院敷地を「習志野豫定地」とし、1. 地勢及地質、2. 地水、3. 土地の清濁、4. 気象、5. 付近村落の健康状態から詳細に報告を行っている。概要は(表2)の通りで、津田沼停車場と習志野捕虜病院共に風が強く、兵営地として必ずしも適当でなく、両地に差が認められないことふれた上で、土地の清濁と周辺村落の健康状態より「津田沼豫定地」の方が適しているとしている。

これらの報告は最大限に認められ、津田沼停車場北方地区に鉄道大隊材料廠、同南方地区に鉄道大隊の兵営が移転することになった。この南方地区に築かれた鉄道大隊基地が後に千葉工業大学津田沼校舎の前身となる。

### 3. 鉄道連隊第三大隊・鉄道第二連隊の基地設営

津田沼停車場を中心に北に材料廠、南に鉄道大隊基地が置かれることが決まって間もなく、1906(明治39)年6月26日には34,000坪に及ぶ私有地を買収することが取りまとめられ、7月19日に19,315円58銭3厘で取得されることになった<sup>5)</sup>。

鉄道大隊基地・同材料廠の建設が進められていた中で1907(明治40)年9月に鉄道連隊へと昇格することとなり、この時に編成された連隊本部、第一・第二大隊はこちらも新たに兵営が築かれた都賀村作草部(現・千葉市中央区椿森)に置かれ、第三大隊が津田沼に配置されることになった。

鉄道連隊第三大隊が津田沼に入営したのが1907(明治40)年11月である。(図2)は、入営後間もない1910(明治43)年の鉄道連隊第三大隊基地であるが、敷地西側に南北に隔てて兵舎等が建てられており、また、総武鉄道を挟んで北側に材料廠があり、敷地中央に細長い形状をした倉庫が南北に並んでいたことがわかる。

(図3)は1917(大正6)年の第三大隊基地・材料廠だが、1910(明治43)年と比べると基地内の建物配置は変わっておらず、1907(明治40)年の入営当初より基地設備が整っていたことを理解できる。一方で、材料廠には倉庫が多数増えてい

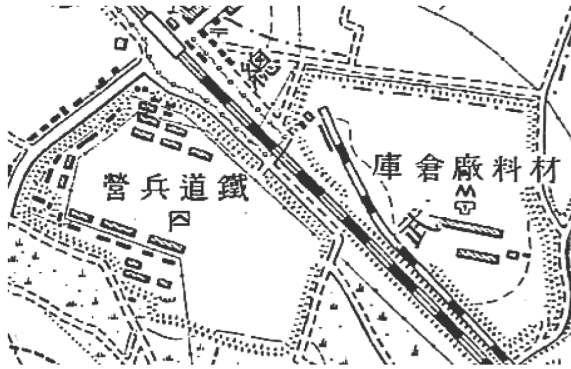


図2 鉄道連隊第三大隊敷地 (1910年)<sup>6)</sup>

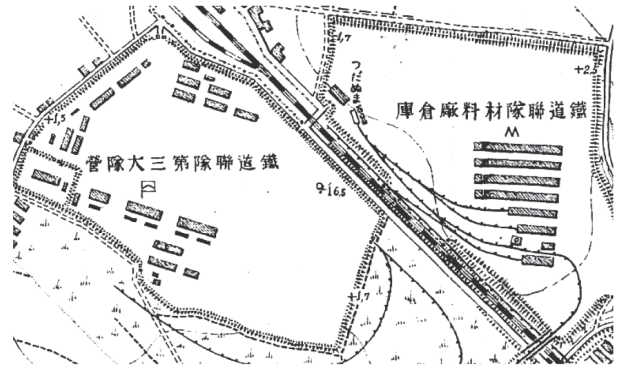


図3 鉄道連隊第三大隊敷地 (1917年)<sup>7)</sup>

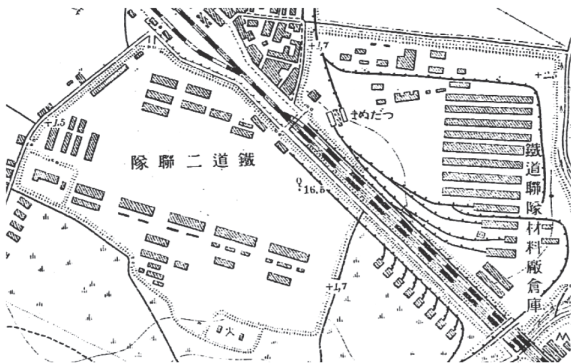


図4 鉄道第二連隊敷地 (1932年)<sup>8)</sup>

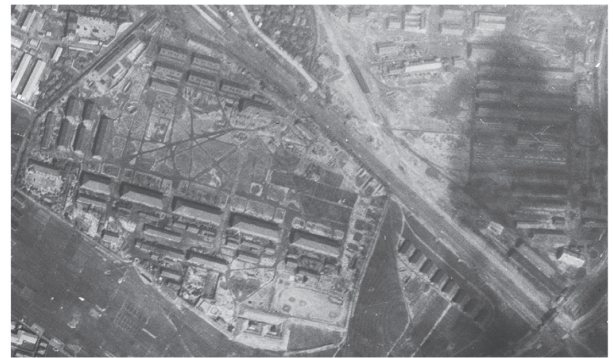


図5 旧鉄道第二連隊敷地 (1946年)<sup>10)</sup>

表3 鉄道第二連隊昇格後に設営された基地設備<sup>9)</sup>

1919年7月1日	第3・第4中隊兵舎竣工
1920年10月4日	木・鍛工場竣工
1921年7月-9月	蹄鉄工場設置に伴い、表門・風紀衛兵所・馬繋場を移築
1921年12月15日	被服庫、車輛庫、演習材料庫竣工
1922年9月22日	器材庫、普通線車輛庫1棟新築
1923年2月28日	連隊本部竣工
1924年1月6日	第1・第2中隊兵舎竣工
1924年8月-11月	材料廠竣工
1925年2月28日	材料廠器具材料庫2棟竣工
1929年2月25日	架橋材料庫2棟竣工

ることが明らかであり、まずは基地機能を優先して整備して、その後に材料廠の設備拡充に取り組んでいたことがうかがえる。

1932 (昭和7) 年になると、新たに兵舎・倉庫が加えられている (図4)。これは1918 (大正7) 年8月1日に第一・第二大隊を第一連隊、第三大隊を基に第二連隊として2個連隊に編成替えとなり、津田沼の兵営が鉄道第二連隊基地となったことで (表3) のように連隊本部・兵舎などの基地設備の拡充が行われたことによるものである。

(図5) は、終戦直後の旧鉄道第二連隊基地であるが、(図4) と大きく変わらないことから、1932 (昭和7) 年頃には鉄道第二連隊基地・材料廠の設備が整っていたことがわかる。その最も拡充されていた頃を伝える航空写真が (図6) で「中央の楕円形が400mグラウンド、放射状の歩道の集合点附近が連隊本部[30]・表門[33]・衛兵所[32]、その背後が総武本線で、以下

反時計回りに器材庫[2]~[7]・馬屋[1]・兵器庫[9, 11, 12]・被服庫[13]・将校集会所[14]・運転教育部[16]・医務室[21]・兵舎4棟 (手前より第7・第8中隊[17], 第5・第6中隊[18], 第3・第4中隊[19], 第1・第2中隊[20])・投炭練習場[22]・炊事場[24]・酒保[23]など」<sup>11)</sup> が並ぶ配置構成であったという。

#### 4. 千葉工業大学津田沼校舎の兵舎転用と解体まで

前節までにおいて、鉄道大隊が津田沼に設置されるまでの経緯、そして鉄道連隊第三大隊から後の鉄道第二連隊となる基地設営の推移について論じてきた。本節では、終戦後に鉄道第二連隊基地としての役割を終え、千葉工業大学津田沼校舎へと転用された学舎群の移り変わりについて論じる。

1945 (昭和20) 年8月15日に終戦を迎え、軍事施設の大部分はその役割を失うことになった。鉄道第二連隊基地も同様で、その跡地は国鉄が鉄道教習所津田沼分校として一時的に使用していたが、これを1951 (昭和26) 年に千葉工業大学が払下げの申請を行い、翌1952 (昭和27) 年3月31日に16,102.04坪の敷地を32棟の旧基地建物と共に998万8,072円で取得することになった。

ここに現在の千葉工業大学津田沼校舎の礎が築かれたわけだが、戦災復興の中ですぐさま校舎新築とはいかず、鉄道第二連隊の基地施設を改修して転用した。改修工事は土地取得契約を結ぶ前の1951 (昭和26) 年7月より先行的に着手されており、東側より2つ目に位置していた兵舎 (図6-[19]) を実験室と教室に改修して、これが後に2号館となった。次いで旧

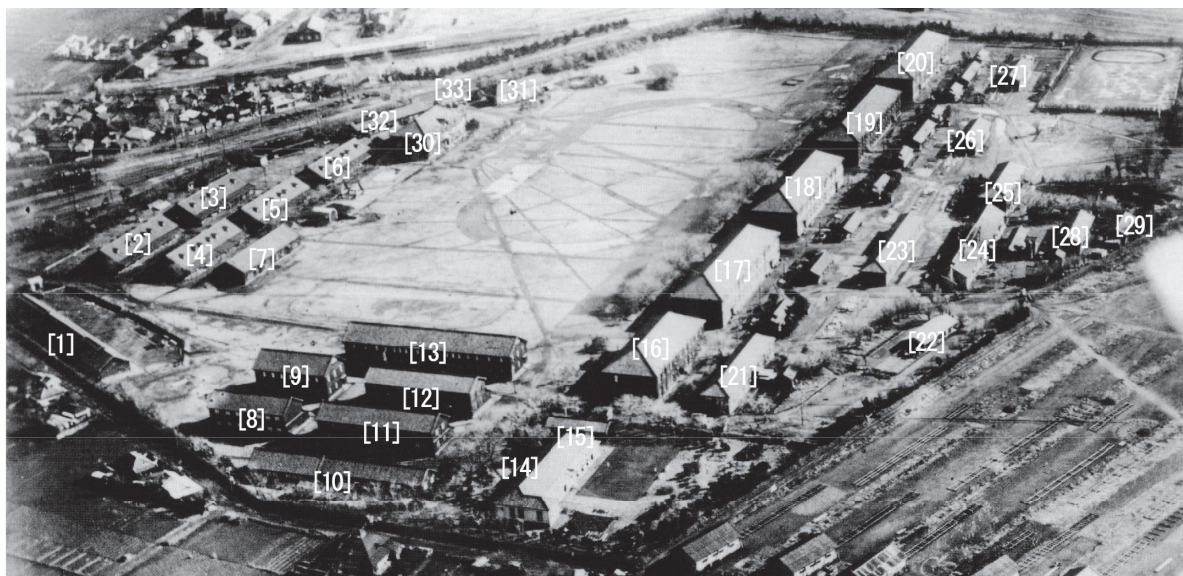


図6 鉄道第二連隊基地・同材料廠 航空写真（昭和9年頃）<sup>12)</sup>



図7 千葉工業大学津田沼校舎校地（昭和38年）<sup>13)</sup>

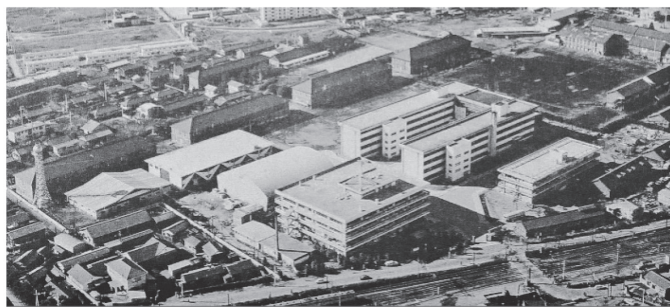


図8 千葉工業大学津田沼校舎校地（昭和42年頃）<sup>14)</sup>

連隊本部（図6-[30]）を本館とし、これらの改修を皮切りに次々と旧鉄道第二連隊基地建物が学舎へと変えられていった。

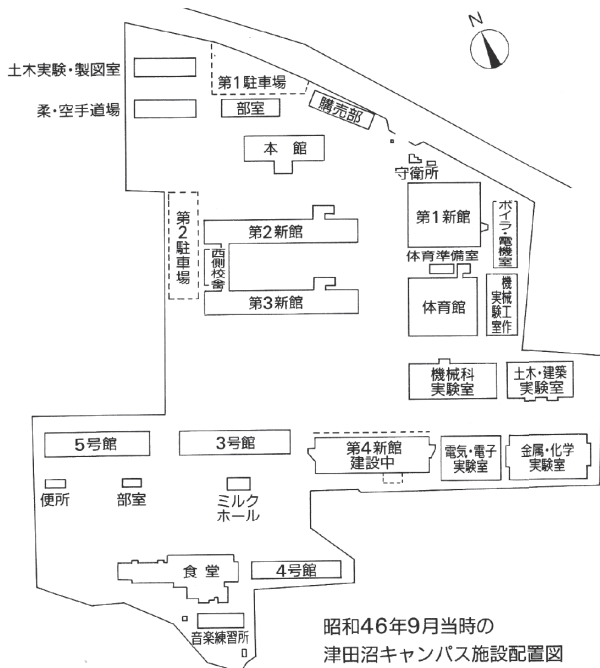
千葉工業大学津田沼校舎の設置後に大学の文教施設として初めて新築されたのが1960（昭和35）年6月に鉄骨造で竣工した体育館で、それに次いで第1新館（旧1号館、平成23年解体）が1961（昭和36）年8月、第2新館（旧2号館、平成20年解体）が1963（昭和38）年4月に共に鉄筋コンクリート造で完成した。元々鉄道第二連隊基地には中央に広大なグラウンドがあり（図6）、これらの新築学舎はその「空隙地」を埋めるように建てられていったことがわかる（図7）。これは続いて建てられた第3号館（旧3号館、昭和39年竣工、平成20年解体）、土木・建築実験室（昭和41年竣工）、機械科実験室（旧機械科実験室棟、昭和42年竣工、平成20年解体）も同様に、次第に津田沼校舎の建物密度が高くなっていったことを伝えているが（図8）、一方で1965（昭和40）年を迎える頃から鉄道第二連隊の旧基地施設を前身にする学舎を建て替えて新築校舎とするものが増えてくるようになった。

そのうち最も早く取り壊されることになったものが本館として使われていた旧鉄道第二連隊本部で、これは1964（昭和39）年に鉄筋コンクリート造により新たに本館として建て替えられた（旧本館、平成23年解体）。次いで1968（昭和43）年頃には1号館（旧第1・第2中隊兵舎）が取り壊され、金属・化学

実験室（平成24年解体）と電気・電子実験室が共に1969（昭和44）年に建てられた。さらに1970（昭和45）年頃に2号館（旧第3・第4中隊兵舎）が解体となり、跡地に新4号館（現4号館）が1972（昭和47）年に竣工した（図9）。

このようにして旧鉄道第二連隊基地建物は失われゆく前途にあったが、それを決定的にしたのが1972（昭和47）年5月に部室棟となっていた5号館（旧第7・第8中隊兵舎）が火災焼失したことである。これを機に翌1973（昭和48）年に「千葉工業大学構内計画」が構想され、同年の内に3号館（旧第5・第6中隊兵舎）、製図室など、翌1974（昭和49）年には購買部と呼ばれていた6号館（旧馬緊所）、さらに翌1975（昭和50）年には4号館、食堂、音楽練習所など鉄道連隊第三大隊設置当初から構えられていた旧基地施設が取り壊された。鉄道第二連隊基地施設を前身に持つ学舎群は昭和40年代の終わりと共に全てその姿が失われたのである（図10）。

以上の鉄道第二連隊の兵舎群の建設から千葉工業大学津田沼校舎の学舎への転用の推移を（表4）にまとめた。現存する通用門を除いて使用年数は最長で69年、平均して58年であった。特に兵舎は、竣工年の古いものほど学舎に転用されてからも長い期間に亘って使用されていた。このことは、元々鉄道連隊第三大隊基地として設営された時は西側一帯が中心で、後に鉄道第二連隊への昇格で連隊本部や兵舎が東側に新築さ



昭和46年9月当時の  
津田沼キャンパス施設配置図



図 10 千葉工業大学津田沼校舎校地 (1975年)<sup>16)</sup>

図 9 千葉工業大学津田沼校舎建物配置図 (1971年頃)<sup>15)</sup>

表 4 鉄道第二連隊基地から千葉工業大学津田沼校舎に転用された旧基地施設の用途・使用年数の詳細<sup>17)</sup>

No.	建設年	基地用途	建設時出典	解体年	学舎用途(解体時)	解体時出典	使用年数
1	～1932年	馬屋	陸地1932	～1961年	学外	院図1961	(最長)30年
2	1907年頃	器材庫	陸地1910	～1961年	学外	院図1961	(最長)55年
3	1907年頃	器材庫	陸地1910	1973年	土木実験・製図室	千工50史	67年
4	1907年頃	器材庫	陸地1910	～1970年	学外	院図1961	(最長)64年
5	1907年頃	器材庫	陸地1910	1973年	柔道・空手道場	千工50史	67年
6	1907年頃	器材庫	陸地1910	1975年	部室	千工50史	69年
7	1922年	器材庫	陸地1932	～1970年	学外	院写1970	(最長)49年
8	～1932年	詳細不明	陸地1932	～1961年	学外	院図1961	(最長)30年
9	1907年頃	兵器庫	陸地1910	～1961年	学外	院図1961	(最長)55年
10	～1932年	詳細不明	陸地1932	～1961年	学外	院図1961	(最長)30年
11	1907年頃	兵器庫	陸地1910	～1961年	学外	院図1961	(最長)55年
12	1907年頃	兵器庫	陸地1910	～1961年	学外	院図1961	(最長)55年
13	1921年	被服庫	鉄二歴史	～1961年	学外	院図1961	41年
14	1907年頃	将校会議所	陸地1910	～1961年	学外	院図1961	(最長)55年
15	1907年頃	詳細不明	陸地1910	～1961年	学外	院図1961	(最長)55年
16	1907年頃	運転教育部	陸地1910	～1961年	学外	院図1961	(最長)55年
17	1907年頃	第7・第8中隊兵舎	陸地1910	1972年	5号館(部室棟)	千工50史	66年
18	1907年頃	第5・第6中隊兵舎	陸地1910	1973年	3号館	千工50史	67年
19	1919年	第3・第4中隊兵舎	鉄二歴史	1970年頃	2号館	千工50史	52年
20	1924年	第1・第2中隊兵舎	鉄二歴史	1968年頃	1号館	千工50史	45年
21	1907年頃	医務室	陸地1910	～1961年	学外	院図1961	(最長)55年
22	～1934年	投炭練習場	鉄連写真	～1961年	詳細不明	院図1961	(最長)28年
23	1907年頃	酒保	陸地1910	1973年	ミルクホール	千工50史	67年
24	1907年頃	炊事場	陸地1910	1975年	食堂	千工50史	69年
25	1907年頃	詳細不明	陸地1910	1975年	4号館	千工50史	69年
26	1907年頃	詳細不明	陸地1910	1975年	音楽練習所	千工50史	69年
27	～1932年	詳細不明	陸地1932	～1975年	詳細不明	院写1975	(最長)44年
28	～1925年	詳細不明	陸地1925	～1975年	学外	院写1975	(最長)46年
29	～1932年	詳細不明	陸地1932	～1979年	学外	院写1979	(最長)48年
30	1923年	連隊本部	鉄二歴史	1964年	本館	千工50史	42年
31	1907年頃	風紀衛兵所	鉄二歴史	～1963年	詳細不明	千工同窓	(最長)57年
32	1907年頃	馬繋場	鉄二歴史	1974年	6号館(購買部)	千工50史	68年
33	1907年頃	表門	絵葉書	現存	正門(後に通用門)	現存	110年

れて基地機能の中心が移っていき、千葉工業大学津田沼校舎になってから東側より順次学舎の整備が進められていったことによるものである。

## 5. 鉄道連隊基地施設についての考察

### 5-1. 連隊本部

鉄道第二連隊の基地施設における個々の建築の詳細について



図11 鉄道第二連隊本部 正面外観<sup>18)</sup>



図12 千葉工業大学津田沼校舎本館<sup>19)</sup>

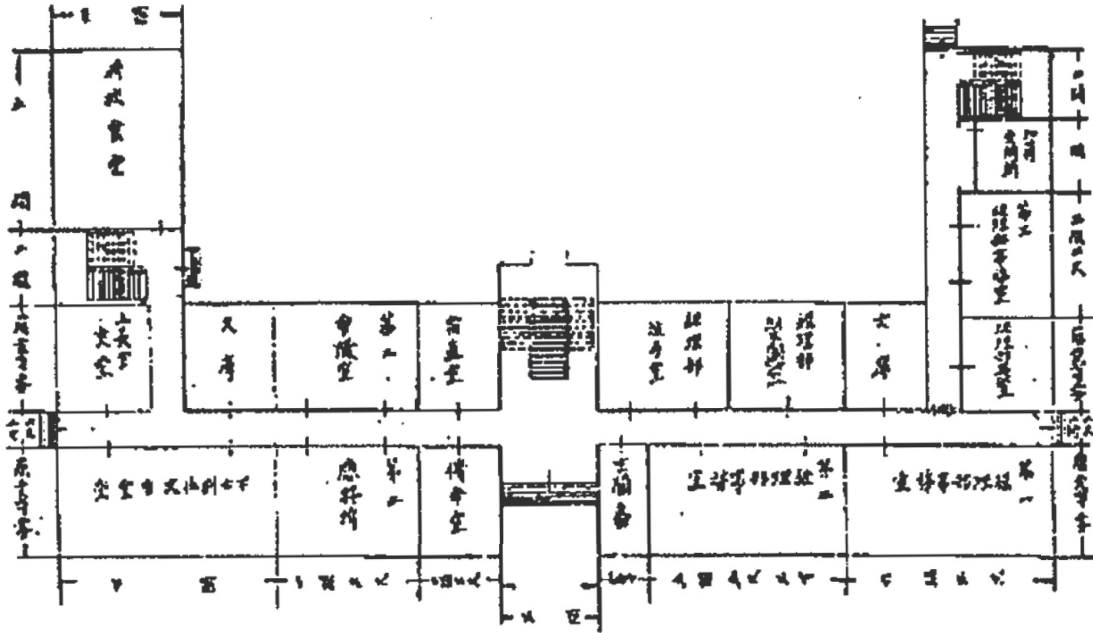


図13 司令部庁舎 1階模範平面図<sup>20)</sup>

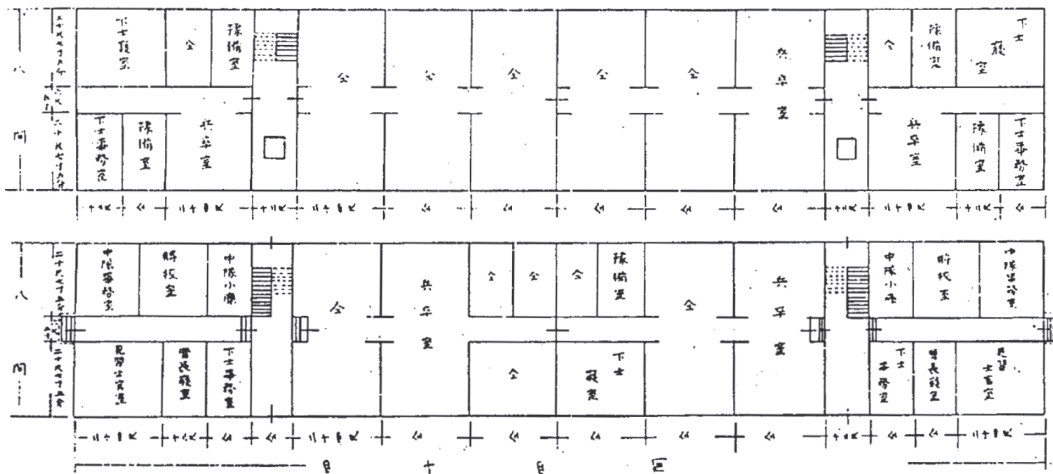


図14 兵舎 模範平面図 下：1階，上：2階<sup>21)</sup>

では写真や資料が少ないため不明な点が多い。本節では、中でも建築の全体像を捉えることが可能である連隊本部（千葉工業大学本館）、千葉工業大学津田沼校舎3号館として使用された第5・第6中隊兵舎、そして鉄道第二連隊基地の遺構として唯一現存する表門（現・千葉工業大学通用門）について考

察を行う。

連隊本部（図11）は、1923（大正12）年2月に竣工した木造2階建、寄棟造葺瓦葺の建築で、外壁はドイツ式下見板張とし、1、2階の間はドイツ壁の設えとして通風口を設けている。これは東西方向に長い矩形形状をして、2つ組とした上げ下げ



図 15 鉄道第二連隊 兵舎内観<sup>22)</sup>

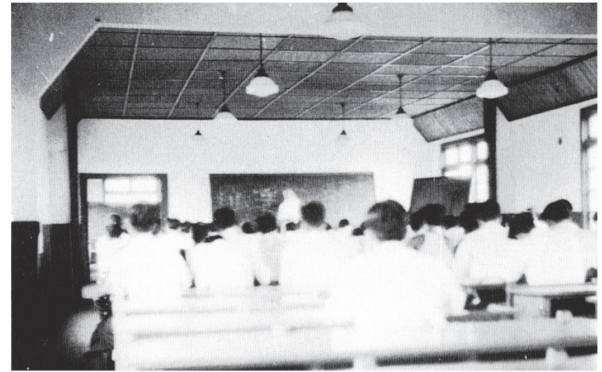


図 16 旧兵舎を転用した教室内部<sup>23)</sup>



図 17 鉄道第二連隊表門（現・千葉工業大学通用門）

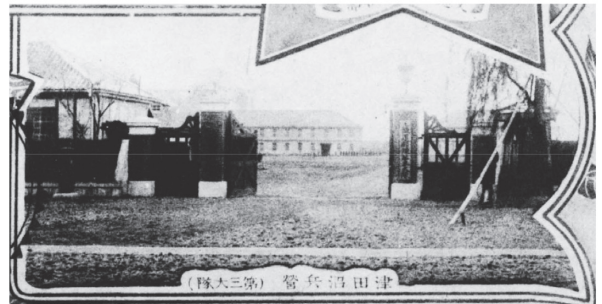


図 18 鉄道連隊第三大隊表門<sup>24)</sup>

窓を南北面に7つ、東西面に3つ配して、南面中央には破風を付けて菊花紋章を飾り、1階にはポーチを設けて正面玄関とする。

(図12)は、千葉工業大学本館として改修された後の旧連隊本部である。外壁は塗装され、正門に近い東面中央にポルティコが付設されている。当初より東西面中央には出入口が備えられており、本館へ改修されたといっても平面構成の変更はごく軽微なものであったと思われる。(図13)は、1910(明治43)年に陸軍省がまとめた司令部庁舎の模範平面図で、全体をコの字型として正面中央に玄関を置き、中央部分はホールとなって奥に折り返しの階段を備え、中廊下を配して左右に諸室を並べるという平面構成である。鉄道第二連隊本部は長方形形状であるが、これに通ずる平面構成であった可能性が高い。

### 5-2. 第5・第6中隊兵舎

鉄道第二連隊基地において兵舎は敷地南側に4棟並べられていた(図6)。ここでは東側から3つ目に位置し、後に千葉工業大学津田沼校舎3号館となった第5・第6中隊兵舎を取り上げる。

第5・第6中隊兵舎は、津田沼に鉄道連隊基地が設置された当初から所在した最も古い基地施設の1つで、これは木造2階建の寄棟造棧瓦葺として1,2層の間に水切庇を巡らし、隅柱を立てた外壁をアメリカ式下見板張として上げ下げ窓を配した建築であった。また、出入口を左右に計2ヶ所設け、これは背面の同じ箇所にも開けられていることから、内部で通じることがうかがえる。

平面構成を伝える資料は見つかっていないが、先述の連隊

本部と同様に1910(明治43)年にまとめられた模範平面図がある(図14)。これも両側に正面・背面に通ずる出入口を配しており、共通した造りであることがわかる。また、(図15)は鉄道第二連隊兵舎の内部で、三八式歩兵銃が並べられた中廊下を挟んで1区画を1個分隊8名が使用するものとし、左右に8つのベッド、そして中央にテーブル・椅子を配置していたことがうかがえる。これは(図14)にある「兵卒室」と呼ばれる下級軍人たちの生活領域と同一の造りと見られ、鉄道第二連隊兵舎は兵舎の模範平面図(図14)と非常によく似た平面構成であった可能性が高い。

第5・第6中隊兵舎は戦後になって、千葉工業大学津田沼校舎3号館となるが、外観は水切庇と1階の隅柱・窓枠を白く塗り、教室等に転用するために開口部を新たに開けたほどで大きな変化は見られなかったが、内部は「兵卒室」を仕切っていた柱・壁などを取り外して広い一室空間へと改修して使用していた(図16)。

### 5-3. 表門

現在、千葉工業大学通用門として使用されている門柱(図17)は、旧鉄道第二連隊基地で表門となっていたもので、同基地施設において唯一現存する遺構である。これは中央に親柱を2本置いて観音開きの重厚な木戸を入れ、さらに両脇に控柱を添えて片開きの木戸を備えたもので、明治時代によく見られる一般的な門の形式になるものである。門柱はいずれも赤煉瓦をイギリス積みで積み上げたもので、基礎と頂部には花崗岩(御影石)を据えている。

1911(明治41)年11月22日の鉄道連隊千葉転営の記念絵

葉書に津田沼に置かれた鉄道連隊第三大隊の表門が写されている(図18)。これより鉄道連隊第三大隊基地が津田沼に築かれた当初より、後に千葉工業大学通用門となる表門が設置されていたことが明らかにされている<sup>25)</sup>。

現在は校地北側中央に置かれているが、「大正十年七月より九月に亘り、蹄鉄工場の設置に伴ひ、表門、風紀衛兵所、馬緊場を現在位置に移轉す」<sup>26)</sup>とあり、これが移されたものであったことがわかる。1910(明治43)年時点では後に表門が置かれる位置の正面には兵舎がなく、また左脇に基地施設がなかったことからこのことは明らかといえる(図2)。(図18)に見られるように鉄道連隊第三大隊の兵営が築かれて間もない時期で正面に兵舎が見え、左脇に基地施設が所在した立地となると、津田沼停車場に近い角地に入出口が設けられていたことから(図3)、基地設置当初の表門は北西隅に置かれていたと考えられるだろう。

## 6. まとめ

本稿では、千葉工業大学津田沼校舎となって今日に至る旧鉄道第二連隊基地の津田沼への設置と兵営建設の経緯、そして後に学舎に転用され、それが失われていくまでの推移について明らかにした。

1896(明治29)年11月に創設された鉄道大隊(後の鉄道連隊)は、総武鉄道(現・総武本線)・房総鉄道(現・外房線)を演習訓練に兼用する計画を立てたことで、1907(明治40)年11月に鉄道連隊第三大隊基地として津田沼停車場南側に兵営が築かれ、同じく北側に鉄道連隊材料廠が置かれた。これは民有地買収が必要になるものの土地の清浄さならびに周辺村落の衛生状態がよく、将来的な基地の拡充が容易という利点から定められたものであった。

鉄道連隊第三大隊基地は、設置間もない頃から基地設備が充足されていたが、1918(大正7)年に鉄道第二連隊へと昇格となったことで、連隊本部や兵舎などが新たに建設されて基地設備が拡充された。元々基地施設は敷地西側に配されていたが、連隊本部が新たに建てられて中心区域が東側へと移り、かつこれが広がっていった。津田沼停車場に近い北西隅の角地に置かれていた表門が1921(大正10)年に連隊本部脇となる北側中央に移設されたのも鉄道第二連隊昇格に伴う基地施設拡充の流れに応じたものである。

1952(昭和27)年に旧鉄道第二連隊基地は千葉工業大学が払下げを受けて津田沼校舎となり、兵舎をはじめとした旧基地施設が学舎へと転用された。旧鉄道第二連隊基地は中央に広大なグラウンドがあり、1960(昭和35)年以降より鉄骨造ないしは鉄筋コンクリート造で体育館や新校舎がここを埋めるように新築されていった。一方で、1965(昭和40)年を迎える頃からは本館(旧連隊本部)をはじめ、次々とそして急速に旧鉄道第二連隊基地施設を前身とする学舎群は建て替えられ、昭和40年代には失われた。

こうした千葉工業大学津田沼校舎における一連の学舎整備は、鉄道第二連隊の中心区域であった東側より始まり、次等に西側へと進められた。これはちょうど鉄道連隊第三大隊から鉄

道第二連隊の基地整備が西側から東側に向けて進められていったのと軌を逆にするものであった。

## 謝辞

本稿は河上裕也氏がまとめた「千葉工業大学津田沼校舎における鉄道第二連隊兵舎の転用に関する歴史的研究」(平成27年度千葉工業大学建築都市環境学科卒業論文)の研究成果を下地に大幅な加筆・修正をもってまとめたものである。研究の遂行にあたって千葉工業大学同窓会事務局より古写真等の資料の提供を受けた。ここに記して本稿作成にお力添えいただいた関係各位に深く感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) 「千葉工業大学50年史」刊行委員会編：千葉工業大学50年史 学校法人千葉工業大学1992年
- 2) 帝國軍隊歴史刊行會：鉄道第二連隊歴史1932年

## 注

- 1) 鉄道国有決定ノ上ハ某区域ヲ画シ陸軍演習訓練ノ為経営スルノ件公文別録・陸軍省・明治十九年～大正七年・第一巻 1905年
- 2) 4) 軍務局 鉄道大隊及同材料廠移転の件 密大日記 1906年
- 5) 近衛師団土地買収の件 密大日記 1906年
- 6) 大日本帝國陸地測量部：二万分一地形圖 佐倉近傍 23 號習志野 1910年3月
- 7) 大日本帝國陸地測量部：一万分一地形圖 下志津及習志野原近傍 11 號津田沼 1917年10月
- 8) 大日本帝國陸地測量部：一万分一地形圖 下志津及習志野原近傍 13 號 1932年11月
- 9) 前掲 参考文献(2) 鉄道第二連隊歴史 pp.25-27 より基地施設拡充に関する項目を抜粋して作成
- 10) 国土地理院所蔵空中写真 USA・M58-A-6-94 1946年
- 11) 12) 高木宏之：日本陸軍 鉄道連隊写真集 潮書房光人社 2015年 pp.66 説明文より引用。カッコ内の表記は筆者による補筆で、数字は(図6)の基地施設を推定して記入した。
- 13) 14) 千葉工業大学同窓会事務局所蔵
- 15) 前掲 参考文献(1) 千葉工業大学50年史 pp.157
- 16) 国土地理院所蔵空中写真 KT756Y-C11-9 1975年
- 17) 各出典の凡例は次の通りである。陸地：大日本帝國陸地測量部作成地図、鉄二歴史：前掲 参考文献(2) 鉄道第二連隊歴史、鉄連写真：前掲注11 日本陸軍 鉄道連隊写真集、院図：国土地理院地形図、千工50史：前掲 参考文献(1) 千葉工業大学50年史、院写：国土地理院空中写真、千工同窓：千葉工業大学同窓会事務局所蔵古写真、絵葉書：交通兵旅団司令部、鉄道連隊千葉兵営、津田沼兵営(第三大隊)、千葉県立房総のむら所蔵(山中コレクション 資料番号0000097)
- 18) 前掲注11 日本陸軍 鉄道連隊写真集 pp.68
- 19) 前掲 参考文献(1) 千葉工業大学50年史 pp.100
- 20) 中森勉：明治後期における陸軍省『建築要領草案』にみる標準化について - 師団司令部建築を例として - 日本建築学会北陸支部研究報告集 第38号 1995年 pp.485
- 21) 中森勉：明治中期以降における兵舎建築について 日本建築学会大会学術講演梗概集 1995年 pp.18 当該論文では上図が1階、下図が2階と説明されているが、出入口に引違戸、左右出入口に数段の上下口の図示あることから上図が2階、下図が1階と判断した。
- 22) 高木宏之：写真に見る鉄道連隊 光人社 2011年 pp.53
- 23) 前掲 参考文献(1) 千葉工業大学50年史 pp.102
- 24) 前掲注17 交通兵旅団司令部、鉄道連隊千葉兵営、津田沼兵営(第三大隊)より鉄道連隊第三大隊部分のみをトリミングして図示した。
- 25) 習志野市社会教育課：新ならしの散策 No.116 2009年
- 26) 前掲 参考文献(2) 鉄道第二連隊歴史 pp.26